

## 食肉について

林 正 夫

昨年来乳価の問題が、やかましく論議されているが、乳と同じように国民生活に、深く食い込んでいる肉の問題が、それほど騒がれないのはどうしたことか。昨年1月から開設されている、中央卸売市場法による大阪枝肉取引市場などを推進母体として、肉の取り引きを近代化する意図で、農林省は家畜取引制度改善調査会をつくって本格的に肉畜及び肉の問題と取り組む気構えを示している。

わが国の国民1人1日当りの肉の消費量は6.8g(昭和31年)で(卵は9.3g,牛乳が38.6g),年々10何%かずつ伸びているものの、諸外国のそれに比較すれば、まだ問題にならない。

大体畜産物の消費量の多いか少ないかによって、その国の文化水準がわかると言われる位で、早急にこれらの消費の伸びが期待される。

ところが、乳や肉などの畜産食品は、比較的高価なので、昔のように牛乳が薬であったり、肉はお祭りか何かの時位でないと口にしなかつたりした時ならばいざ知らず、消費がふえて来た今日では、値段が少し高くなっても、家計への圧迫は相当大きくなる。事実肉の値段が今より安くなれば、もっと沢山たべたいというものが調査対象の84%もあって(食糧についての世論調査報告書—市部(31. 3. 31)—内閣総理大臣官房審議室等)いかに多くの潜在需要があるかを知ることができる。

このような消費弾性の大きい乳肉の如きものの消費を、順調に伸ばすことによって、畜産の発達を期待しようとする場合、生産農家は、生産技術を高め、経営を合理化して、生産コストを低減することが第一で、ついで生産物の流過程に深い関心を寄せ、取り引きの近代化に積極的に努めるといふ、基本的態度が必要となって来る。こうすることによって、できるだけ安い価格の畜産食品を消費者の台所へ送り届け、もっと多くの消費を促がして、そのはね返りが生産増強に

なるといった関係の循環をくり返すことである。

ひるがえって岡山県の肉資源を見ると、畜産県と言われるだけあって、和牛は102,700頭(昭和33年2月1日現在)で全国第4位を占め、年間の県内での屠殺が約13,000頭、県外移出が約23,000頭で——これらがすべて肉牛ではなく、直ぐ肉となるものは12,000頭位——豊富な肉牛の供給地となっている。

ついで豚は、大体1万頭程度飼われていて——統計では7,300頭となっているが一年間の県内での屠殺が14,000頭近くに上っているが、肉豚の県外移出は僅々2,000頭足らずに過ぎない。肉資源として豚の役割が大きくクローズ・アップされようとしているとき、早急に今後の振興策が望まれる所以である。

昨今やかましく取り上げられている食鶏については、185万羽の鶏の半分が廃鶏となるとすれば、年間90万羽となり、大きな肉資源である。今まで、廃鶏は余り好ましいルートを通して商品化されてはいなかったが、養鶏経営の合理化には、駄鶏淘汰の励行と廃鶏の有利販売ということを念頭に置いてかかる必要がある。と同時にブロイラー(若鶏)産業の今後の急速な発達を勘定に入れると、食鶏も肉資源として相当重要視しなければならない。

その他の家畜の謂わゆる雑肉はハムなどの加工肉の消費需要の伸びが、精肉のそれをはるかに上廻っていて、前者が年々10数%程度であるのに比べて後者のそれは約30%となっているが、前に述べた牛、豚、鶏肉の3者に比べて、本質的な重要さは認められないようだ。

今これらについて、もう少し詳しく触れて見よう。

統計で見ると、食肉の中で牛肉の占める割合は、昭和30年の57.1%から、昭和32年には43%に低下している。豚肉は逆に33.9%から49.4%に向上している。以前から関西では牛肉が、関東では豚肉が消費の王座を占めていたので、われわれの日常生活の中では前述の

## 岡山畜産便り1959.08

傾向は余り気づかれないようだ。何故牛肉が食肉の王座から転落したか？しかも仔牛を合わせると約80万頭の牛が年々屠殺され、仔牛の生産は60万頭に過ぎず、差引き20万頭の減少を招いている現実をどうするか？輸入肉の問題は？など仲々むつかしい問題がある。

輸入肉については、国内の食肉市場を攪乱しない程度に加工原料向の下等牛肉がある程度——昭和32年は約23,000 tの枝肉が輸入されて、国内の肉牛価格を抑えたが、昭和33年は5,000 tに減っている——はいいが、豚肉その他の精肉または加工肉は輸入の必要が認められないと思う。

つぎに前述の2つの？については今までの和牛飼育の零細規模を改めて、経営の拡大をはかることを提唱したい。肉の生産効率だけで牛と豚とを比較すれば、後者が優れてるという。実際には、与える飼料の質的内容の相違、農家経営の立地条件の差違など、すべての有機的関連性において、総合判定すべきであるが和牛飼育の適地では前述の経営規模の拡大によって、所得をふやさなければならない。こうすれば、自ら生産コストも低減され、生産性の低い家畜というそしりも免れ得て、和牛の飼養頭数の増加も期待できると思われる。しかし岡山県などを含めて西南暖地におけるよりも、東北、北海道などに将来和牛の増加は期待されよう。

岡山県北部の生産地では、全国の和牛を近代的なものに改良するための原種をつくる——改良増殖——に努め、南部では、肥育技術及び経営を改善向上して回転の早い肥育を効率的に集約的にとり入れる、という行き方がいいと思われる。このように立地条件に従って、飼養形態に特殊性を極めてはつきりすべきだと思う。つぎに和牛の改良については、別の機会に割愛するとして、和牛の取り引きの問題が大きく浮かんで来る。

岡山県では和牛の取り引きは、乳牛や豚のそれよりも、家畜商への依存度が高く、家畜商をぬきにしては到底考えられない位だ。ところで家畜商の実態は、一

般には独立した生業としてはなり立たない程度の零細なもので、しかも取り扱う和牛は逆に減っているので、勢い不当に高いマージンによるとか、必要以上に牛を転々と動かすとか、とかくゆがめられた形の取り引きになり易く、ひいてはこれが、肉牛の生産コストを高め、或いは農家の所得をへらす原因ともなると思われる。

仔牛の取り引きの産地市場では、極めてスムーズに市場内でのせりによる取り引きが行われているが、南部の集散地家畜市場では、このような近代的な取り引きが円滑に行われにくいとすれば、生産者自身が積極的に立ち上って、別の方策を考えなければならない。即ち農協をとおしての共同購販売ということが根本的な主要さをもって来る。

最近極めて徐々にではあるが、この機運が推進されつつあることは、時代の要請とはいえ、大きな進歩である。冒頭に述べた大阪枝肉取引市場への県畜連からの共同出荷（昭和33年は300頭）、あとまやの共同購入は、生産費の低減、ひいては肉資源増産の近道となるう。

豚は岡山県ではお義理にも盛んだとは言えないが、中小農家で、小額の資本で始められ、資金の回収も早いなどの利害があつて、一方国民の嗜好も漸次豚肉へ傾きつつあるようで、養豚振興は刻下の急務とされている。県勢振興計画では、昭和40年目標の豚飼育頭数を1万頭としているが、これは余りにも控え目な数字だと思われる。肉豚の増産を、優良豚の改良増殖に、具体的な施策の早急な樹立が迫られるわけである。

なお肉豚生産は比較的新しい産業であるから、系統団体による取り扱いが容易な利点を見落してはならない。

食鶏は資源は豊富でも、能率的に商品化のルートにのりにくいものであった。昭和32年中岡山県内で唯一の、食鶏の共販ルートである県養鶏連の取扱数量を見ると、廃鶏3万羽、ブロイラー2.2万羽となっているが、昭和33年は前者が1割増の3.3万羽、後者が3.6万羽となっている。

## 岡山畜産便り1959.08

採卵養鶏をうまくやろうとすれば、駄鶏淘汰による廃鶏の有利販売に手をつけなければならない。またこれから需要の急伸が期待されるブロイラーも、産地では計画的かつ集団的に生産すべき時期になっている。岡山県の業界はこれらを予測して、去る3月に食鶏の冷凍、冷蔵施設を主な事業目的とする冷凍利用農協をうみ、現在または食鶏の一元集荷、処理加工、販売を目的として、岡山県養鶏加工連が、県経済連、県養鶏連を冷凍利用農協を母体として誕生した。これらを中心としての、食鶏の流通改革が多大の期待をもたれている。

一般消費者の食肉への関心が高まり、生産農家もまた経営の改善と合理化のため、肉畜生産への意欲の盛んなとき、なおまた肉畜の取り引きの近代化が種々論議されるときに当って、私見の一端を披瀝した次第である。